



第42回「おかねの作文」コンクール

ネパール教育援助に参加

京都府・洛南高等学校附属中学校 2年 岩破 智弘

卒業して1年、小学校から封筒が届いた。何だろう？ 開けてみると、袋と短い手紙、ネパール通信、そして1枚の写真が入っていた。

写真にはネパールの子供が写っていた。岩と石ころと土、草だけの山肌に、5～8歳くらいの男の子と女の子が4人、手を合わせて僕の方を見ている。ゴム草履をはいている子もいれば、裸足の子もいる。男の子でもピンクや赤の服を着ている。裕福には見えないが目のとてもキレイな子供達だ。

手紙には、「長い間、協力有難うございました。袋のお返しが大変遅くなり申し訳ありません。ネパール通信ダンニャバードを同封したかったので……」という内容が書かれていた。

僕は、小学3年生から卒業するまで、4年間、ネパール教育援助に、毎月1,000円ずつ募金していた。

確か、3年生の時、学校からもらった週報に、一援助のお願い—ネパールが平和国家となるために、子供達を健全に育てていくためのご支援をお願いします。援助金の使用目的は、①教育援助（奨学金・教材教具・学校設備などの充実）②村の貧しい人々の援助③農業援助と載っていたのがきっかけだ。援助の方法は、定期援助月1,000円（年間、1万2,000円）、一時援助いつでもいくらでもだった。

僕は小学校で、「よく祈り、よく学び、持っている力をよく伸ばし、それを使って人に奉仕しよう」と、ずっと教えられていたので、その時、協力したい気がしたのだろうか？ 両親に相談して、どうしても必要な物は買ってもらえる、けれど毎月自分の小遣いが1,000円、そこから出すという約束で月1,000円ずつ募金することになった。その領収袋が送られてきたのだ。

ネパールは、人口2,764万人、5歳未満児死亡率が出生1,000人あたり47人（日本は4人）、成人の識字率49%、1人あたりの国民総所得が290米ドル（日本は3万8,410米ドル）の貧しい発展途上の国だ。¹⁾

ネパール通信には、バニヤタール村に保育園を開き、家賃とミルク代が援助されていることや、高くそびえ立つヒマラヤの山並みは美しいけれど、山岳地帯の

村は地一面茶褐色で、じゃが芋・玉ネギ以外何もとれない、水汲み家畜の飼料刈りは女性と子供の仕事、幼児の世話・留守番は老人の仕事、そのため就学率が低いこと、農業に灌漑設備^{かんがい}が必要なことが書かれていた。

学校では、620人の学生のうち119人が奨学金で勉強している。その中には、父親が交通事故で亡くなり、母親が他家の畑仕事や石運びで少ない賃金を得て家族を養っている家庭の子供や、父親がエイズで死亡、母親はHIVで仕事ができず、教育と母親の薬を援助され、将来、自分達だけになっても生きていけるよう勉強している子供が含まれている。彼らは、授業料・教科書・制服・靴・かばんなどを買うことができず、援助のお陰で支給されるそうだ。栄養が十分とれないため学習理解が遅い子供に栄養剤を飲ませたら、理解能力が出てきたとも書かれていた。

ネパールでは、町から遠く離れた村にいる子供や貧しい家庭の子供、特に女性は、能力があっても医師・歯科医・技師・獣医・看護師になることができない。生きるだけで精一杯で上級教育を受ける機会がないからだ。

最後に、支援者がいることが力強い励ましになると書かれてあった。

それを読んで、何だか事務的に4年間続けたけれども、少しは役に立ったのかな……写真の子供達は、どうしているだろう。僕が卒業して募金をやめた後、誰かが新たに参加してくれていたらいいけれど……と心配になった。

生まれた場所で、ハッピー or アンハッピーが決まる。同じ地球上に生きていても、こんなに違う。僕は、自分の置かれた場所の有難さを改めて感じた。

1,000円。僕にとってはファーストフード2～3回分、少し我慢すれば何とかなる金額だ。もし、ゲーム機を買わなかったら、1年分はすぐ出せる。ネパールと日本では、貨幣価値が違うので、日本で少しの金額でも、ネパールでは随分、大きな助けになるのだ。

この手紙がきっかけで、世界には貧富・出身・性別・宗教など自分ではどうにもできない壁に苦しんでいる子供達がいること、その壁を取り除く重要性、自分には何ができるのだろうか考えた。そして、また一時援助に参加することにした。お年玉の中から1万2,000円募金！これが、僕の今できる活きたお金の使い方だ。

事務局注 1)『世界子供白書 2009』ユニセフ、2009年

